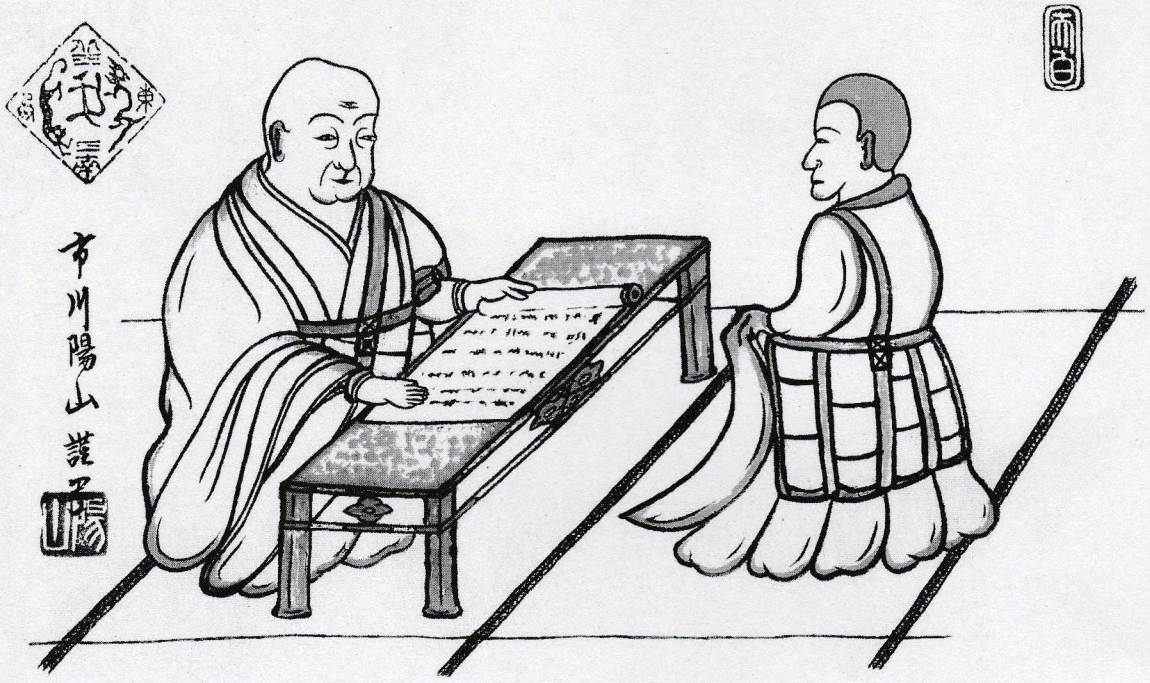
第２７号　　平成２１年１２月発行

みおしえ



ほうねん
法然上人　　しょうこう聖光上人

「法然上人から受け継ぐ　お念仏の教え」

平成２３年には法然上人の八百年御忌をお迎えします。

埼玉教区浄土宗青年会
http://www.saijousei.com

ただうまれつきのままにて
念仏する人を、
念仏にすけささぬとは云う也。
―法然上人御作―

『元祖大師法然上人御法語　前篇　第十四　専修念仏』

《意味》

極楽往生のためには、お念仏の他に何の「助け」も添える必要などありません。ただありのままに素直にお念仏をとなえる人のことを「お念仏の他に助けを添えない（人）」というのです。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

ＮＨＫ教育テレビの「にほんごであそぼ」という番組があります。この番組を我が子と一緒に見ることが日課となってしまいました。語呂が覚えやすい、曲に乗せてあるなどと、番組名通り楽しい言葉遊びなのですが、子どもには難しいと思うような言葉や表現などが、非常に多く出てくるのです。例えば、狂言の〝蚊相撲〟だったり、落語の〝寿限無〟、または夏目漱石の小説の一節などで、「これなあに？」と聞かれて困ってしまいます。まだ幼いから、到底覚えられないだろうとたかをくくっていると、数日後には、おもちゃで遊びながらそれらを口ずさんでいるのです。ビックリすると同時に、我が子の発達を喜んでしまう親バカな私です。それはともかくとして、子どもたちは良いも悪いも関係なく、親の助けを必要としなくとも言葉をよく覚えるものです。

さて、冒頭に掲げましたのは、法然上人の御法語の一節です。まず皆さんが何だろうと思われたのは、「すけささぬ」ではないでしょうか。〝すけ〟は〝助〟であり、お念仏の助けとなる【真理を悟る修行】【戒めを守ること】【仏教を修めようとする心】【他者へのあわれみ】のことを指します。〝ささぬ〟は〝させない・必要がない〟という意味です。つまり、お念仏は助けを必要とせずとも、それだけで成り立つ修行なのです。時代劇に例えて言うならば〝助太刀御無用〟ということになるでしょう。お念仏には頼もしさが備わっていることを法然上人は示しておられます。

そして「ただうまれつきのままにて」という文頭のお言葉ですが、決して「生まれたばかりの赤ちゃんのように」ということではありません。大変間違えやすいのですが、そういう意味ではないのです。例えば、赤ちゃんは清らかな存在として見られますが、赤ちゃんとて、お腹がすいたり、おしりが気持ち悪かったりすると泣いて私たちに訴え、その反面、楽しい時は満面の笑みを見せ、自分が満足すれば穏やかに寝てしまうなどと、生まれつきにして、欲求や喜怒哀楽つまりは煩悩を持ち合わせた〝人〟なのです。そして、それは私たちも同じであり、生きていく上で切っても切り離せない厄介な煩悩というものが付きまとう身心なのです。しかし法然上人は、〝人〟として生きるそのままでいいのだと言ってくださっているのです。

この御法語には「自らが煩悩を持った〝人〟であることを知り、その上でお念仏をおとなえすることは、大変心許ないかもしれません。しかし、お念仏は阿弥陀さまが私たちを救い取るために、お誓いくださった修行です。その頼もしさにおすがりするだけで、他には何も必要ではないのです。」という法然上人の深いお気持ちが込められており、「私たちはありのままで、お念仏をおとなえすればいいのですよ。」とお伝えくださっているのです。上人のお念仏に対する強い信頼を感じ、また、私たちをやさしく後押ししてくださっているように感じられます。

私たち親子は昨年から「にほんごであそぼ」を見る前に、朝のお勤めを一緒にするようにしました。私がとなえるお念仏やお経を真似して、かわいい声でとなえております。その子どもたちが、まずはじめに覚えたのはお念仏です。老若男女や身分を問わず、誰でもができる修行ということに嘘偽りがないことを、実感させられた次第です。「なむあみだぶ、なむあみだぶ」と、今日も明日もそしてその後も、私は私そのままに、子どもたちもありのままに、阿弥陀さまに向かっておとなえいたします。どうぞ皆様もそのままに、手を合わせてお念仏をおとなえください。

合掌

執筆　浄泉寺　峯山篤雄
文責　埼浄青編集委員会

表紙の解説（法然上人から受け継ぐお念仏の教え）

表紙の絵は、浄土宗の元祖法然上人が、二祖聖光上人に出会いお念仏の教えを伝えているときの様子です。

法然上人には沢山のお弟子さんがおりました。長く仕えてくれていたお弟子さんや、お経を美しい声でおとなえするお弟子さん。もちろん仏教の知識の深い人や阿弥陀様への信仰の篤い人など色々なお弟子さんがいました。皆様がご存じの熊谷次郎直実（法力坊蓮生法師）・綽空（親鸞聖人）・九条兼実公を始め非常に多くのお弟子さんがいたのでした。しかし、その中には法然上人の説くお念仏の教えを自分勝手に解釈してしまう人も多くいたのでした。

そして多くのお弟子様の中から、法然上人が浄土宗の正当な後継者として選ばれたのが、表紙の絵に描かれた聖光上人なのです。

「私を信じ、私の名前呼ぶ全ての者を救い取りたい」と誓われた阿弥陀様のお言葉を信じ、只ひたすらにお念仏をおとなえする道を引き継いだのであります。

聖光上人は九州の出身の方で、六年ほど法然上人に常随給仕したのち故郷へお戻りになり、九州地方を中心にお念仏の教えを広めてくださいました。出身地を表す「鎮西（ちんぜい）上人」とも、お呼びすることもあります。

合掌

解説執筆　見立寺　益良龍雄

法然上人略年表

（『法然上人行状絵図』による）

一一三三（長承二）1才　四月七日、美作国（岡山県）にて、ご生誕。幼名　勢至丸。

一一四一（永治元）9才　父、漆間時国、明石定明の夜討ちにあい、死去。叔父・観覚の居る菩提寺に身を寄せる。

一一四七（久安三）15才　比叡山に登り、源光に師事。

一一五〇（久安六）18才　皇円のもとで出家、受戒。西塔黒谷に隠遁し、叡空の門に入る。法然房源空となる。

一一五六（保元元）24才　嵯峨の清涼寺に参籠。その後、南都の学匠を尋ねる。

一一七五（承安五）43才　立教開宗（専修念仏に帰入する）

一一九七（建久八）65才　二祖・聖光上人、門下に入る。

一一九八（建久九）66才　『選択本願念仏集』を撰述。

一二一二（建暦二）80才　一月二十三日、『一枚起請文』を記す。一月二十五日、御往生。

SAIJOSEI

発行　埼玉教区浄土宗青年会　会長　齊藤栄規

編集委員長　押野見孝道